



Title	『ジョン王』における侵略の経済学
Author(s)	中村, 未樹
Citation	人文学林. 2024, 1, p. 125-142
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95136
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ジョン王』における侵略の経済学

中 村 未 樹

The Economics of Invasion in *King John*

NAKAMURA Miki

要旨: William Shakespeare's *King John*, probably written between 1595 and 1596, describes foreign invasion and uses many economic terms. This would have been induced by the Spanish invasion of England in 1595 and by a financial difficulty both England and Spain faced then. This paper analyses the connection between international politics and economic matters in *King John* with a special reference to the Anglo-Spanish war. The first section surveys the Spanish invasion and the English reaction to it. The second section examines the way in which international politics in *King John* revolve around possession. The third section focuses on invasion and profit, and the fourth section analyses contractual human relationships in the play. The final section considers how *King John* and England deal with private interest and national interest.

キーワード: 侵略, 利益, 経済

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) の歴史劇『ジョン王』(*King John*) では経済に関係する語が多く用いられている¹⁾。本作品における経済の問題については資本主義, あるいは階級という観点からこれまで考察が行われている²⁾。本稿では, 『ジョン王』の執筆・上演年を1595～1596年頃と想定し, 当時イングランドとスペインの間で行われていた戦争(英西戦争)を背景としながらこの作品に窺える経済と政治の関係性を明らかにしていく³⁾。戦時下

*本稿は日本シェイクスピア協会主催の第60回シェイクスピア学会(2022年10月2日, 於甲南大学)のパネル・ディスカッション「シェイクスピアと新経済批評」における発表「『ジョン王』における侵略の経済学」に加筆修正したものである。

1) possession, commodity, purchase, bargain などである。

2) 『ジョン王』と資本主義の関連を扱った論としてSmith, Kronshageを参照。社会的地位と経済の観点から本作品を論じたものとしてGieskesを参照。

3) 本作品の執筆・上演年についてはオックスフォード版テキストの編者A. R. ブラウンミュラー (A. R. Braunmuller) の意見に従う(15)。なお, 本論ではジョージ・ピール (George Peele) の『ジョン王の乱世』(*The Troublesome Reign of John, King of England*) を『ジョン王』の材源とみなすが, 『ジョン王の乱世』においてもpossession, purchase等の語が使われており, 『ジョン王』における経済用語の多用はその影響を受けているとも考えられる。

における両国の経済状況、そして侵略のコストと利益に関する意識が『ジョン王』に反映されていると考えられる。

第1節ではスペインのイングランド侵攻とイングランドの対応について概説する。英西戦争の背景にはプロテスタント対カトリックという宗派の対立が存在するが、本稿では経済的側面に焦点を当てることにする。第2節では『ジョン王』において国際政治が土地や財産の所有を軸として展開していくことを確認する。第3節では侵略と利益をめぐる意識について、第4節では契約としての人間関係について説明する。最後の節では個人的利益と国家的利益という観点から『ジョン王』及び同時代のイングランドについて考察する。

1. スペインのイングランド侵攻とイングランドの対応

1560年代末よりスペインはエリザベス1世の政権転覆を目的としたイングランド侵攻、いわゆる“the enterprise of England”を計画していた⁴⁾。その最初の試みは1588年における無敵艦隊の遠征であり、その後もスペインが再びイングランドに侵攻するという噂が囁かれていた⁵⁾。そして1595年7月23日、コーンウォールの村、マウスホール(Mousehole)とニューリン(Newlyn)にスペイン軍が上陸する。これはスペインによる初めてのイングランド本土上陸であり、スペイン軍は各村を焼き払い、教会でカトリック式のミサを行った後、8月4日に撤退した(Hutchinson 247)。アーデン版テキスト第3シリーズの編者たちは、『ジョン王』で描かれる他国のイングランド侵略とこの事件の関連性を指摘している(Lander and Tobin 6)。

スペインとの戦争が長期化する中、イングランドの財政状況は悪化していた。当時のイングランドの公文書を見ると、船の購入代金や修理費用、そして兵士への支払いに関する記述が散見され、イングランドにとっては消耗戦となっていたことがわかる⁶⁾。一方、スペインは新大陸の植民地から得られる金や銀によって膨大な収入を得ていたが、ネーデルラントの独立戦争の戦費などのため支出も増加していた。アルマダ海戦では1000万ダカットの経費がかかり大きな損失となった。1596年にはフェリペ2世は債務不履行を起こしている。1598年にフェリペが亡くなった時、彼の借金合計は1億ダカットという膨大な金額になっていた(Kennedy 47)。イングランド侵攻に関しても、フランシス・ドレイク(Francis Drake)たちの私掠活動に対する報復、そしてスペインの名誉のためという動機もあったが、スペイン本土とスペインの植民地、及びその間の航路をイングランドの攻撃から守るためのコストよりもイングランドに侵攻するコストの方が安くすむという経済的な思惑もあった(Parker, *Impudent King* 306, Hammer

4) “the enterprise of England”についてはHammer 137, Parker, *Impudent King*, Part V, Parker, “The Making of Strategy”, Chapter 5を参照。

5) CSPD 19を参照

6) 例えばCSPD 3, 6, 9, 11, 12を参照。

137)。

スペインの財政事情が芳しくなかったことは、1584年に出版された『西方植民論』(“Discourse of Western Planting”)においてリチャード・ハクルート (Richard Hakluyt) が既に指摘している。ハクルートはフェリペの経済状況について以下のように述べている。

[F] for this Phillippe already owinge many millions, and of late yeres empai red in credite. . . . And this weyed, wee are to knowe what Phillip ys in the west Indies. And that wee be not abused with spanishe braggs, and made to beleve what he is not, and so drawn into vain feare suffer fondly and childishly our owne utter spoile. And therefore wee are to understande that Phillippe rather governeth in the west Indies by opinion, then by mighte. (Hakluyt 246–47)⁷⁾

ハクルートのこのような忠告があったにも関わらず、スペインの経済力に対するイングランドの不安は1590年代においても残っていた。例えば、『ギアナの発見』(*The Discovery of the Large, Rich, and Beautiful Empire of Guiana* 1596年出版)の読者への序文において、ウォルター・ローリー (Walter Raleigh) はスペイン国王の領地、強大な軍事力、そしてその回復力について述べ、「財産」(“treasure”)を持つ君主は優位に立てると書いている (xiv)。ローリーは彼我の差を所有という側面において意識している。そして、スペインの金の影響力について以下のように述べている。

It is his Indian Golde that indaungereth and disturbeth all the nations of Europe, it purchaseth intelligence, creepeth into Councels, and setteth bound loyalty at libertie, in the greatest Monarchies of Europe. (Raleigh xiv)⁸⁾

また、イングランド公文書の1595年4月7日付けの文書では、フェリペ2世は西インド諸島から得られる一年分の歳入と同額の費用がかかったとしても、イングランドに自ら侵攻すると述べたと報告されている (Green 29)⁹⁾。フェリペ2世が本当にこのような発言をしたかどうかは定かではないが、この情報はイングランド側にとってはスペインの財力を改めて想像させるもの

7) (日本語訳)「このフェリペは既に何百万ダカットも借金があり、近年では信用を損ねています(中略)このことを考慮すると、西インド諸島におけるフィリップがどのようなものかわかるでしょう。スペインの自慢に騙されないように、そして彼の本当ではない姿を信じ込んで無駄に恐れを感じ、愚かにまた幼稚にも我々の破滅を被ることがないように。それゆえ、フェリペは西インド諸島において力ではなくむしろ評判によって統治していると理解すべきなのです。」

8) (日本語訳)「スペイン王のインドの金がヨーロッパの全ての国々を危機に陥れ、混乱させている。ヨーロッパの最も偉大な君主国においてインドの金が情報を買い、会議の中に入り込み、忠誠心を自由にしている。」

9) カトリック教徒のニコラス・ウィリアムソン (Nicholas Williamson) の供述に基づいた情報である。

であったに違いない。

スペインの実際の経済状況とは裏腹に、イングランドは敵国スペインの土地や兵力、金という所有物に不安を抱いていた。イングランドにとって、この不安を払拭するための打開策とみなされたのは、海外進出事業、当時の言葉を使えば“enterprise”（以下、エンタープライズ）によって土地や金を獲得することであった。*Oxford English Dictionary*によるとエンタープライズは軍事活動の意味を持つとともに、後には商業的な文脈において用いられていた（“enterprise”, n. 1a, b.）。実際、財政が悪化していた16世紀末のイングランドにとって、エンタープライズは商業的な意味合いをより強めていた。ハクルートは自分が提言する北アメリカの領土の獲得・所有のための事業を“this enterprise”と呼び（212, 213）、手に入る資源について述べている——“this western voyage will yelde unto us all the commodities of Europe, Affrica and Asia . . . and supplye the wantes of all our decayed trades.”（Hakluyt 222; 下線は引用者）¹⁰⁾。ハクルートが“commodities”（天然資源あるいは商品¹¹⁾）の例として具体的に挙げるのは金、銀、銅である。経済的損失を補填するためにも、イングランドはスペインに対抗してエンタープライズに取り組む必要があった¹²⁾。16世紀末におけるスペイン及びイングランドそれぞれの侵略の背景には経済的動機が存在していたのである。

スペイン軍のイングランド上陸の後、1595年8月9日及び11日に、スペインの植民地であるパナマへの遠征に向かう準備をしていたドレイクとジョン・ホーキンス（John Hawkins）にエリザベス1世から二度命令が出されている。最初の命令では、スペインの準備態勢が1588年よりも大がかりであり、来年夏には再び侵攻してくるに違いないということ、「個人的な利益」（“private profit”）に囚われることなくスペインの沿岸で警戒を続け、問題がないようなら遠征に出発しても差し支えないと書かれている（CSPD 89）。女王はドレイクたちが国防の任務を怠って勝手に移動してしまうことを危惧していたようである。二つ目の命令においてもエリザベスは国家の安全を強調している。

In the beginning of your journey, some course may be taken both secure for us and not unlikely to prove profitable to your enterprise. We think you should shape your course along the coast of Spain. . . . This being done, you should set some course likely to intercept the fleet daily expected, wherein, if you shall be so happy as to do some honourable service, it must needs be profitable. You are to consider what prejudice it would be to us to be assailed in your absence, and what loss of honour, hope, and profit, if by insisting only on one ground, which may have a contrary success, all the ends both of security and commodity shall

10) (日本語訳)「この西方への航海はヨーロッパ、アフリカ、アジアの全ての天然資源を私たちに与えることでしよう（中略）そして全ての私たちの衰えた交易の欠乏を埋めてくれるでしよう。」

11) *Oxford English Dictionary*, “commodity”, n. 3.a,b.

12) ローリーはスペインの侵攻によってイングランドの“forraigne enterprizes”（「海外進出事業」）が阻害されていると述べている（Raleigh xiv）。

be neglected. (CSPD 91; 下線は引用者)¹³⁾

エリザベスは国の安全と名誉 (“honour”) を語る一方で, “profitable”, “profit” そして “commodity” という語が表すようにドレイクたちの遠征によって得られる資源と利益を意識していることがわかる。国家の安全保障と利益という二つの目的がここで前景化してくる。

同時期に書かれたと推定される『ジョン王』においても, 侵略戦争と国防をめぐる問題が扱われ, “possession”, “commodity” がキーワードとなっている。以降の節では, 本作品における政治が所有, 経済性, 利益, 契約などの経済的な事項といかに関係付けられているか確認していく。

2. 国際政治と所有

『ジョン王』では “possession” という語がシェイクスピア作品の中で最も多く使用されている¹⁴⁾。この劇が描く国際政治においては所有・所有物が重要な意義を持つことになる。劇冒頭では王権と領土の所有をめぐる争いが描かれる。フランス国王フィリップ (King Philip) がジョンの甥アーサー (Arthur) をイングランドの正統な王位継承候補者として擁立することを知ったジョンは, 母親のエリナー (Queen Eleanor) と以下のように話し合う。

KING JOHN. Our strong possession, and our right for us.

QUEEN ELINOR. Your strong possession much more than your right,

Or else it must go wrong with you and me. (1.1.39-41)¹⁵⁾

エリナーはジョンの権利が不確かなものであることを認識しており, むしろ “possession” に依拠するよう論じている。この母の忠告に従って, ジョンは以降において財産, 兵力, 王冠, 土地という自分の所有物を政治的交渉の場で誇示していく¹⁶⁾。まず, ジョンはアーサーに対して, 自分の下にきたならばフランス王が得ることができる以上のものを与えようと述べて何らかの

13) (日本語訳)「航海の始めは, 我々にとって安全で, かつあなたがたのエンタープライズに利益をもたらすと思われる航路を選択するとよいでしょう。スペインの沿岸を進むようにしなさい。(中略)それが終わったら, 日々見込まれる船を拿捕できるような航路を行くとよいでしょう。その際, 名誉ある軍事活動を行えるなら, それは利益をもたらすに違いありません。反対の結果をもたらすかもしれない一つの根拠に固執して, 安全と利益に関わる全ての目的が無視された場合, あなたがたが居ない間, 私にどのような危害が加えられるか, そしていかなる名誉, 希望, 利益を失うか, 考えてください。」

14) 合計で5回使用されている。“possession”は所有するという行為とともに所有物を意味する (Oxford English Dictionary, “possession”, 1a, 2a)。他には変化形の possess, possessed も使用されている。

15) *King John* からの引用は全てジェシー M. ランダー (Jesse M. Lander) と J. J. M. トービン (J. J. M. Tobin) 編のアーデン版第3シリーズに依る。

16) アーデン版第3シリーズの注釈は “our strong possession” を “possession of the crown” と解釈している。ニュー・ケンブリッジ版の注釈は “your strong possession” を “your possession and your might” としている。日本語翻訳ではちくま文庫 (松岡和子訳), 白水Uブックス (小田島雄志訳) とともに「兵力」と訳している。本稿では所有物と訳しておく。

代価を約束している (2.1.156-58)。また、ジョンを王として受け入れようとしないアンジェの市民の前で、ジョンは自分の王冠に言及する (2.1.273)。さらに、フランスと最初の戦闘が行われた後、ジョンはフィリップに対して流す血 (“blood”) は残っているのかと問いかけ (2.1.334)、兵力で自軍が上回っているかのように語っている。

その後、アンジェの市民が提案したフランス皇太子ルイ (Lewis the Dauphin) とジョンの姪ブランシュ (Blanche) の結婚をジョンは受け入れる。ジョンは領地のいくつかをフランスに譲渡することを約束する。

KING JOHN. If that the Dauphin there, thy princely son,
Can in this book of beauty read ‘I love’,
Her dowry shall weigh equal with a queen:
For Anjou, and fair Touraine, Maine, Poitiers,
And all that we upon this side the sea—
Except this city now by us besieged—
Find liable to our crown and dignity,
Shall gild her bridal bed and make her rich. . . (2.1.484-91; 下線は引用者)

シェイクスピアはジョンが史実において譲渡した領土よりも誇張して書いている (Watkins 95)。また、領土が「婚姻のベッドを黄金で飾り (“gild”) 彼女を豊かにする」とあるように、金のイメージが使用されている。ジョンはさらに持参金としてイングランドのコイン3万マルクも約束している (2.1.530)¹⁷⁾。こうして、ジョンは自分の所有物の豊富さを示すことによってフランス王との交渉の場で優位性を得ようとしている¹⁸⁾。

しかし注意したいのは、ジョンはフランスへの侵攻を始めるにあたって修道院からの金銭の徴収を命じており (1.1.48-49)、戦費の不足が最初から示唆されていることである。後の場面でも、ジョンは修道院の財産の略奪を命じている。

KING JOHN. [*to Bastard*] Cousin, away for England. Haste before,
And ere our coming see thou shake the bags
Of hoarding abbots; the fat ribs of peace
Must by the hungry now be fed upon:

17) 『ジョン王』の材源の一つであるラファエル・ホリンシェッド (Raphael Holinshed) の年代記では、銀貨3万マルク (“the summe of thirtie thousand markes in siluer” (Holinshed 279)) と書かれている。この点を参照するならば、“gild” は「銀で飾る」という意味にも解釈できる (Oxford English Dictionary, “gild”, v. 1.b)。シェイクスピア作品における “gild” の使用例については Egan を参照。

18) 幼少期においてジョンは父ヘンリー2世が定めた相続案では土地を分与されなかった (Morris 19-20)。“lack-land” という以前の経済状況を背景として、ジョンの土地を誇示する態度を分析することもできるだろう。

Imprisoned angels set at liberty. (3.3.6-10; 下線は引用者)

エンジェル金貨 (“angels”) を蓄えている資産家である聖職者たちへの妬みがここには読み取れる¹⁹⁾。これらの点を考慮した場合、先述した “gild” という語が含蓄するようにジョン王が誇示していた財産は表面的なものであり、彼の実際の懐事情とは異なっている。この点は想像上のフェリペ2世とその実態の乖離を想起させる。

和平案を受諾したフランス王フィリップは、ジョンの言葉に影響されたかのように金の比喻を用いている。

KING PHILIP. [*to Blanche*] 'Tis true, fair daughter, and this blessed day

Ever in France shall be kept festival.

To solemnize this day the glorious sun

Stays in his course and plays the alchemist,

Turning with splendor of his precious eye

The meagre cloddy earth to glittering gold. (3.1. 75-80; 下線は引用者)

太陽を錬金術師に譬える比喻がここでは用いられている。錬金術の思想において、太陽の光は鉱物を金に変容させる力を持つと考えられていた (Abraham 194)。大地が金に変わるというフィリップの台詞はこうした思想的背景においてのみならず、経済的な観点からも検討することができる。つまり、ジョンとの和平によってフランスが得る領土はアーサーを援助することで得られるものをおそらく上回るものであり、フィリップは意識上の計算において土地を金へと変容させているとも考えられる。

フィリップは当初、ジョンとの戦いを前にして「フランス人の血の海の中を歩いていく」 (“Wade to the market-place in Frenchmen's blood” (2.1.42)) と不退転の決意を表していた。だが、結局フィリップがたどり着いたのは敵であるジョンとの取引の場 (“market-place”) であった。こうして、戦場において土地と人間が取引される品物になっていく²⁰⁾。

『ジョン王』の国際政治では経済性が優先的に考慮されている。バスタード (Bastard) が解説しているように、ジョンがブランシュの結婚に賛同したのは、アーサーに負けて「全て」 (“the whole”) を失うよりも領土の「一部」 (“part”) を放棄するほうが良いという損得勘定に基いたものである (2.1.562-63)。兵力に関しても損失 (“loss”) や温存 (“save”) について述べられており (2.1.46-49, 341, 348)、経済的な運用が重視されている。このような経済的な意

19) エンジェル金貨についてはFisher 41を参照。

20) クリスチャン・A・スミス (Christian A. Smith) は金銭と高価な土地によって和平が購入されており、商品交換がここで行われていると指摘する (4)。

識は、侵略における富の獲得という面においてさらに確認することができる。

3. 侵略と利益

劇冒頭、フォークンブリッジ家の土地相続をめぐるロバート（Robert）とバスタードの争いが描かれる。これはイングランドの王権争いの変奏であり、財産の所有権が問題になっている。バスタードが先王リチャードの庶子であることに気づいたエリナーは、フランス侵攻に参加するよう彼に促す。バスタードは、本来自分のものである年収500ポンドの土地というフォークンブリッジ家の財産を放棄して、イングランド軍に加わることを決意する。

QUEEN ELEANOR. I like thee well. Wilt thou forsake thy fortune,

Bequeath thy land to him [Robert] and follow me?

I am a soldier, and now bound to France.

BASTARD. Brother, take you my land, I'll take my chance.

Your face hath got five hundred pound a year,

Yet sell your face for five pence and 'tis dear.

Madam, I'll follow you unto the death. (1.1.148-54; 下線は引用者)

“chance”（運）という語が示唆するようにバスタードの行為は投機的であり、王族としての血筋が彼の元手となる²¹⁾。そして、彼の投機の間となるのがフランスの戦場である。ジョン王の側近として出征することで得られる利益は、郷土フォークンブリッジ家の土地による収入よりも上回るという予測が、バスタードの選択の背後にはあるのだろう²²⁾。

バスタードは自分も含めて人を経済的価値という側面において評価している。彼はロバートの瘦せた顔を薄いグロート銀貨になぞらえている——“Because he hath a half-face, like my father. / With half that face would he have all my land: / A half-faced groat five hundred pound a year!” (1.1.92-94)。バスタードの計算では、4ペンス分の価値しかないグロート銀貨のような貧相な顔のロバートには年収500ポンドは不釣り合いであり、一つ前の引用で彼が言っているように5ペンスでも高いのである²³⁾。すなわち、

500ポンド（土地の年収）＞5ペンス＞4ペンス（ロバート、グロート銀貨）

21) ジェームズ・L・コールドウッド（James L. Calderwood）は、バスタードはリチャード1世の息子という立場を将来に対する投資として受け入れると指摘する（342）。

22) 16世紀において元々ジェントリー階級であったウィリアム・セシル（William Cecil）も同様に国王の側近となることによって出世した（Gieskes 791）。

23) グロート銀貨についてはFischer 83を参照。

という式がバスタードの脳裏には浮かんでいる。ロバートという人間は土地と貨幣との関係性において量的な価値付けがなされている²⁴⁾。

バスタードだけでなくイングランドの軍隊に参加する兵士たちも、戦争を儲けるための投資機会とみなしている。フランスの使節シャティヨン（Chatillon）は、イングランド軍に加わる兵士たちが「新たな財産」（“new fortunes”）を獲得するための元手として彼らの「財産」（“fortunes”）を売却していると述べている（2.1.65-71）。戦争は資産の運用、そして投資という資本主義的な活動を活性化させていくのである。このように見ると、戦争という国家のプロジェクトにおいて、そこに加わる個人の様々な思惑が関与していることがわかる。

先述したイングランドのパナマ遠征に関しても同様の状況がうかがえる。エリザベス1世はドレイクたちによる個人的な利益の追求に釘を刺していた。しかし女王自身、この遠征の費用の3分の2を出資しており、彼女個人にとってもこのエンタープライズは商業的な意味合いを持つ投資の場となっていた（Hammer 191）²⁵⁾。また、ロンドン、プリストル、サウサンプトンなどの港から大量の商品がスペインに輸出されていることが1593年12月14日に報告されている（Tawney and Power 80-81）。禁じられている敵国スペインとの貿易が密かに行われていたものであり、戦争の最中において国家的利益よりも個人的利益を優先する商人たちが暗躍していたことがわかる。個人的利益と国家的利益をめぐる問題については最後の節で述べる。

第5幕ではフランスによるイングランド侵攻が描かれている。フランス皇太子ルイは、ローマ教皇の使節パングルフ（Pandulph）にイングランド侵攻の中止を求められて激高する。

DAUPHIN. I am too high-born to be propertied,
To be a secondary at control,
 Or useful serving-man and instrument
 To any sovereign state throughout the world.

 You taught me how to know the face of right,
 Acquainted me with interest to this land,
 Yea, thrust this enterprise into my heart.

 Am I Rome's slave? What penny hath Rome borne?
What men provided? What munition sent
To underprop this action? Is't not I

24) ビョーン・クワイヤリング（Björn Quiring）はこの箇所を『ジョン王』における人の「物象化」（“commodification”）の一例として挙げている（155）。

25) 残りの費用は指揮官たちと個人投資家によって負担された（Hammer 191）。なお、エリザベス1世は1596年のイングランドによるカディス遠征の際も投資を行っている（McDermott）。

That undergo this charge? Who else but I,
 And such as to my claim are liable,
 Sweat in this business and maintain this war? (5.2.79-82, 88-90, 97-102; 下線は引用者)

最初の下線部にあるように、ルイはローマの手先として動かされはしないと断言し、フランスの王族としてのプライドと主体性を主張している。だが、別の観点から見れば、ルイはイングランド侵攻という「エンタープライズ」がもたらす利益（イングランドという領土）に動かされ、「コントロール」(“control”) されていると考えられる。また、お金と兵隊を調達したのは自分でありローマは1ペニーも出していない、というルイの言葉には戦争のコストに対する意識が強く表れている。

4. 契約関係としての人間関係

これまで見てきたように、『ジョン王』においては登場人物の多くが利益によって動かされている。このことを具体的に説明しているのがバスタードの“commodity”に関する独白である。

BASTARD. And this same bias, this Commodity,
This bawd, this broker, this all-changing word,
 Clapped on the outward eye of fickle France,
 Hath drawn him from his own determined aid,
 From a resolved and honourable war
 To a most base and vile-concluded peace.
 And why rail I on this Commodity?
 But for because he hath not wooed me yet:
 Not that I have the power to clutch my hand
 When his fair angels would salute my palm,
 But for my hand, as unattempted yet,
 Like a poor beggar, railleth on the rich.
 Well, whiles I am a beggar, I will rail,
 And say there is no sin but to be rich;
 And being rich, my virtue then shall be
 To say there is no vice but beggary.
 Since kings break faith upon Commodity,
Gain be my lord, for I will worship thee. (2.1.581-98; 下線は引用者)

この引用における“commodity”は“self-interest”と解釈されることが多い²⁶⁾。「利益」は「女衞」(“bawd”), 「仲介人」(“broker”)という仲介的役割を表す語で言い換えられている。また, “commodity”の具体的例としてバスタードは金貨を含蓄する“fair angels”という語を挙げている。土地, 金, 金貨といった「利益」は人と人の間を仲介するのである²⁷⁾。ジョンとフィリップという敵対する王たちを土地が仲介していた。また, ソールズベリー伯爵(Earl of Salisbury)をはじめとするイングランドの貴族たちとフランス皇太子ルイとを結びつけるのも「利益」である。ルイは自分の味方に付く報酬をソールズベリーたちにほめかす。

DAUPHIN. Come, come; for thou shalt thrust thy hand as deep
 Into the purse of rich prosperity
 As Lewis himself: so, nobles, shall you all
 That knit your sinews to the strength of mine,
 And even there, methinks, an angel spake. (5.2.60-64; 下線は引用者)

ルイは「豊かな繁栄の財布」, そして“nobles”, “an angel”というどれも金銭を表す言葉を使っている²⁸⁾。フランス皇太子とイングランド貴族たちは, 金貨を媒介として結び付けられるのである。

『ジョン王』の劇世界において, 人間関係は利益や物を媒介とした契約関係として語られていく。例えばアーサーに見方するオーストリア公(Duke of Austria)は, アーサーに対するキスを“seal to this indenture of my love”(2.1.20; 「愛の契約書に捺印をする」)と形容しており, 「愛」は契約として語られる。アーサーの母親コンスタンス(Constance)は, オーストリア公に対する「返礼」(“requital”(2.1.34))について言及している。また彼女は自分たちを裏切ったフランス王フィリップについて「贋金」(“counterfeit”(3.1.99))の王と非難し, 彼の誓約違反を贋金で騙した契約違反として批判している(3.1.99-101)。そして, コンスタンスはアーサーとエリナーの関係さえも契約的なものとして語っている。

CONSTANCE. Do child, go to it grandam child,
 Give grandam kingdom, and it grandam will

26) 以下のエディションを参照-ケンブリッジ大学出版局版(John Dover Wilson編), アーデン版第2シリーズ(E. A. J. Honigmann編), ペンギン版(Robert Smallwood編), ニュー・ケンブリッジ版(L. A. Beaurline編), オックスフォード大学出版局版(A. R. Braunmuller編), アーデン版第3シリーズ(Jesse M. Lander & J. J. M. Tobin編)。以下では小田島雄志訳に従って「利益」と訳しておく。

27) スミスはカール・マルクス(Karl Marx)がこの引用中の“commodity”を「取引される物」と解釈したことを根拠に, “commodity”は「交換価値を持った商品」という意味に解釈できると指摘している(7)。交換という行為がこの“commodity”の背景にあることを踏まえれば, 商品という含蓄も考えられるのであり, 先述したハクルートの言葉にある“commodity”の意義とも繋がってくる。

28) ノーブル金貨(noble)についてはFisher 98-99を参照。

Give it a plum, a cherry, and a fig,

There's a good grandam. (2.1.160-63; 下線は引用者)

下線部の「王国を渡せば、おばあちゃんがプラムとチェリーといちじくをくれる」という言葉はエリナーに対する嫌味であるが、戦争を背景としてこの祖母と孫の親族関係が家族間の無償の愛情ではなく、物の交換による相互利益——王国と果物——を目的とした取引関係として語られている。

4幕以降ではジョンの所有者としてのアピールは効果を失っていく。まず、ジョンによってアーサー暗殺を命じられたヒューバート (Hubert) は、最後にはジョンとの約束・契約を破り、ジョンの財産全てをもらったとしてもアーサーには手を触れないと言う——“I will not touch thine eye / For all the treasure that thine uncle owes” (4.1.121-22)。ヒューバートはアーサーの命を大金と交換できるという交換価値を持つものとしてはみない。その点で彼は、アーサーを援助することの見返りを期待するフランス王やオーストリア公とは対照的である。しかし、王の財産ではなく無垢な少年の救済を選択したヒューバートの判断は、アーサーの死とイングランドの貴族たちの離反という思わぬ結果を生み出していく²⁹⁾。

また、ジョンが行った二度目の戴冠式はソールズベリーによって批判されている。

SALISBURY. Therefore, to be possessed with double pomp,

To guard a title that was rich before,

To gild refined gold, to paint the lily,

To throw a perfume on the violet,

To smooth the ice, or add another hue

Unto the rainbow, or with taper-light

To seek the beauteous eye of heaven to garnish,

Is wasteful and ridiculous excess.

.....

It makes the course of thoughts to fetch about,

Startles and frights consideration,

Makes sound opinion sick, and truth suspected

For putting on so new a fashioned robe. (4.2.9-16, 24-27; 下線は引用者)

29) アーサーは “I am not worth this coil that's made for me.” (4.2.127; 「自分にはこのような騒ぎの元となる価値はない」) と述べていた。アーサーの無邪気な言葉は、利益優先の行動をとるフランス王たちとの対照性において観客にはより印象付けられる。

ソールズベリーは王冠を再度頭上に頂いた王の姿に威圧されることはない。ジョンの行為は“gild”という表面的な細工であり、何ら価値を生み出さない無駄な余剰として否定されている。

劇の後半では所有者としてのジョンの影響力が弱まり、ジョンは不安に取りつかれていく。興味深いことに、“possess”という語は劇の後半では精神的に囚われるという文脈において使用されている。例えば、フランス軍の来襲を聞いたジョンは次のように述べている——“Why seek'st thou possess me with these fears?” (4.2.203)。

最終場において、死が迫ったジョンは自分を紙に書かれた像に譬えている。

KING JOHN. I am a scribbled form, drawn with a pen

Upon a parchment, and against this fire

Do I shrink up. (5.7.32-34)

紙に書かれた像という比喩は、実体のない虚像としてのジョンの経済状況を彷彿させる。また、契約に関する表現が劇で多用されていたことを踏まえると³⁰⁾、「羊皮紙」(“parchment”)という語に観客は契約書を想像したかもしれない。その場合、ジョンの人生の終焉は契約書が燃える、つまり契約の消滅というイメージで提示されることになる。

5. 個人的利益と国家的利益

一旦は敵側についたソールズベリーたちは、最後にイングランド側に戻っていく。『ジョン王』において、金銭を媒介とした契約的な人間関係はジョン、そしてルイの場合も結局は臣下の離反を引き起こしている。利益をめぐる意識が、人々を結びつけるとともに、かつその関係を破綻させてもいる。特に、他国による侵略という国家の危機の際に臣下たちの忠誠心をいかに保つか、ということがそこで問題になってくる。

同時代のイングランドにおいてもまさにこのことが喫緊の課題となっていた。1595年5月9日には、カトリック教徒チャールズ・パジェット (Charles Paget) からローマにいるトーマス・スロックモートン (Thomas Throgmorton) への報告において、イングランドでは教皇、スペイン、その他の国の侵略に備えて、カトリック教徒が女王への忠誠 (“to be true to the Queen”) の誓約を行うことが命じられたと書かれている (CSPD 39)。カトリック教徒とスペインとの内通をイングランド政府は危惧したのだろう。

しかし、エリザベス1世からドレイクたちへの二度目の命令が出された次の日の1595年8月12日、オトウェル・スミス (Otwell Smith) からウィリアム・セシル (William Cecil) へ報告

30) これまで挙げた例の他に、2.1.93, 2.1.235を参照。

が届く。それによれば、スペインにいる隠れプロテスタントの商人からの情報として、イングランドからのスペイン王宛ての手紙をスペイン側が入手したが、その手紙には「チャールズ・ハワード」(“Charles Howard”)という署名があり、「ドレイクのことは心配するな、彼にはお金を沢山使わせるが、最後には遠征を中断させるようにする」と書かれていたとされている(CSPD 91-92)。「チャールズ・ハワード」と言えば、当時イングランドの海軍大臣であったチャールズ・ハワード(Charles Howard)と同じ名前である。オトウエルはイングランド政府の中枢部における裏切り者の存在を憂慮する——“I fear the King of Spain has some great man in England his friend. . . . I wish all traitors were cast out of England”(CSPD 92)。

これは偽りの情報であるかもしれない。しかし、もしこのような内通が本当にあったとするならば、『ジョン王』の貴族ソールズベリーの場合のように、何らかの金銭的報酬が「チャールズ・ハワード」という人物とスペインのフェリペ2世を結び付けた可能性があるかもしれない。このハワードが果たして海軍大臣本人であるなら、大臣が敵国と内通しているということになる。つまり、第1節で引用したローリーの言葉を使うならば、金がイングランドの「会議」(“council”)の中に入りこむという事態が生じていたのかもしれない³¹⁾。いずれにせよ、イングランド内の裏切り者が、おそらくは報酬目当てで寝返った可能性が示唆されているのである。先に引用したバスタードの台詞の最後の言葉——“Gain, be my lord”(「利得よ、私の主人になってくれ」)——は利益による人の支配を示しているが、このような金・金銭・利益の支配に国家としてどのように対応するかということが、同時代のイングランドにおいて、そして『ジョン王』においても問われているのである。

劇を締めくくるバスタードの台詞は、この問題に対する一つの対策を提示している。

BASTARD. O, let us pay the time but needful woe,

Since it hath been beforehand with our griefs.

This England never did, nor never shall

Lie at the proud foot of a conqueror

But when it first did help to wound itself.

Now these her princes are come home again,

Come the three corners of the world in arms

And we shall shock them. Naught shall make us rue,

If England to itself do rest but true. (5.7.110-18; 下線は引用者)³²⁾

31) 海軍大臣ノッティンガム伯爵チャールズ・ハワードについてはKennyを参照。ハワードはエリザベス1世に対しては忠実な臣下であったが、一方では私腹を肥やすという側面もあった(Kenny 1-2)。なお、ハワード自身はこのドレイクたちの遠征には関わっていなかった(McDermott)。

32) 最初の下線部2行においても経済的比喩が用いられている。悲しみを既に前金として「時」に払っているのだから今後は余計に嘆かないでおこう、とバスタードは述べている。主君ジョンの死という現実を前にして、バスタードは悲嘆の経済的な運用を意識している。

最後の下線部でバスタードは「イングランドが自分自身に対して忠実（“true”）であるかぎり」と述べている。この劇の最後にある台詞は、イングランドという国家に対する忠誠を国家の安全保障の要として挙げ、国家という枠組み、そして「私たち」（“we”, “us”）という集合へと観客の意識を向けさせる。

このことを念頭に入れながら、第1節で引用したエリザベス1世のドレイクたちへの命令を再度、確認しておきたい。女王はドレイクたちが個人的利益を追い求めることを懸念していた。実際、ドレイクの部下としてこの遠征に参加したトマス・メイナード（Thomas Maynarde）は、ドレイクが航海中に語ったものとして以下の言葉を記録している——“God hath many things in store for us; and I knowe many means to do Her Majestie good service and to make us riche, for we must have gould before wee see England”（Maynarde 19）。ドレイクは金（“gould”）の獲得への期待を述べているが、彼の言う「私たち」（“we”, “us”）に含まれるのは彼とその仲間たちというごく少数の人間であるかもしれない。

もし、ドレイクたちが個人的利益という「主人」に支配されているとするならば、彼らの意識をイングランドという国家に対する忠誠、そして国家の安全と利益へと導いていくことが国王であり彼らの主人であるエリザベス1世の務めとなるのだろう。しかし、エリザベスの二つ目の命令の最後にあった“commodity”が果たして誰の利益を表すものであるかは判断が難しいと言わざるを得ない。先述のとおり女王もこの遠征の投資者であったことを考慮すると、国家的利益のみならず彼女の個人的利益もそこに含まれていると考えられる。『ジョン王』においても、ジョン、フィリップ、そしてルイの行動は国家的利益を意識したものか、あるいは個人的な利益に基づくものなのか、判別が難しい場合が多い。

個人的利益の是非をめぐる当時、議論が行われていた。デイヴィッド・ホークス（David Hawkes）によれば、この時代の“commodity”は不正な利益を含蓄することがあった（100-01）。一方で、個人的利益の追求は必ずしも否定されてはおらず、それを擁護する意見もあった（Ingram 2-3）。また、個人的利益と公的な善を調和させることができるかどうかが大きな関心事になっており、いわゆる「実験企業」（“project”）の背後には個人的欲求を公的な利益に変容させるという狙いもあった（Yamamoto 3, 5）。『ジョン王』は侵略、また利益による支配という歴史的背景において、個人的利益と国家的利益という二つの項の関係を調整していくことの必要性を示しているのである。

引用文献

Abraham, Lyndy. *A Dictionary of Alchemical Imagery*. Cambridge UP, 1998.

Braunmuller, A. R. Introduction. *King John*. By William Shakespeare, edited by A. R. Braunmuller, Oxford UP, 1994, pp.1-93.

- Calderwood, James L. "Commodity and Honour in *King John*." *University of Toronto Quarterly*, vol. XXIX, no. 3, pp. 1-56.
- Calendar of State Papers, Domestic Series, of the Reigns of Elizabeth, 1595-1597*. Edited by Mary Anne Everett Green. London, 1869. Kraus Reprint, 1967. (CSPD)
- "Commodity, n." *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, www.oed.com. Accessed 22 September 2023.
- Egan, Gabriel. "Gilding Loam and Painting Lilies: Shakespeare's Scruple of Gold." *Connotations: A Journal for Critical Debate*, vo. 11, no.2-3, 2001/2002, pp. 165-79.
- "Enterprise, n." *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, www.oed.com. Accessed 22 September 2023.
- Fischer, Sandra K. *Econolingua: A Glossary of Coins and Economic Language in Renaissance Drama*. University of Delaware Press, 1985.
- Gieskes, Edward. "'He is but a bastard to the time': Status and Service in *The Troublesome Raigne of John* and Shakespeare's *King John*." *ELH*, vol. 65, 1998, pp. 779-98.
- "Gild, v." *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, www.oed.com. Accessed 22 September 2023.
- Hakluyt, Richard. "Discourses of Western Planting." *The Original Writings and Correspondence of the Two Richard Hakluyts*, edited by E. G. R. Taylor, vol. 2, Kraus Reprint, 1967, pp. 211-326.
- Hammer, Paul. *Elizabeth's Wars: War, Government and Society in Tudor England, 1564-1604*. Palgrave Macmillan, 2003.
- Hawkes, David. *Shakespeare and Economic Theory*. Bloomsbury, 2015.
- Hutchinson, Robert. *The Spanish Armada*. Weidenfeld & Nicolson, 2013.
- Ingram, Jill Phillips. *Idioms of Self-interest: Credit, Identity, and Property in English Renaissance literature*. Routledge, 2010.
- Kennedy, Paul. *The Rise and Fall of the Great Powers: Economic Change and Military Conflict from 1500 to 2000*. Vintage Books, 1989.
- Kenny, Robert W. *Elizabeth's Admiral: the Political Career of Charles Howard, Earl of Nottingham, 1536-1624*. Johns Hopkins Press, 1970.
- Kronshage, Eike. "Reformation and Transformation: On Religion, Politics, and Economics in *King John*." *Shakespeare Seminar*, vol. 15, 2017, pp. 27-42.
- Lander, Jesse M. and J. J. M. Tobin. Introduction. *King John*. By William Shakespeare, edited by Jesse M. Lander and J. J. M. Tobin, Bloomsbury, 2018, pp. 1-133.
- Maynard, Thomas. "Sir Francis Drake, His Voyage, 1595." *Sir Francis Drake, His Voyage, 1595. by Thomas Maynarde ; together with the Spanish Account of Drake's Attack on Puerto Rico*, edited by W.D. Cooley, B. Franklin, 1970, pp. 3-25.

- McDermott, James. "Howard, Charles, second Baron Howard of Effingham and first earl of Nottingham." *Dictionary of National Biography*, 2021, www.oxforddnb.com.osaka-u.idm.oclc.org. Accessed 20 September 2022.
- Morris, Marc. *King John: Treachery, Tyranny and the Road to Magna Carta*. Windmill Books, 2015.
- Parker, Geoffrey. *Imprudent King: a New Life of Philip II*. Yale University Press, 2014.
- . "The Making of Strategy in Habsburg Spain: Philip II's 'bid for mastery,' 1546–1598." *The Making of Strategy : Rulers, States, and War*, edited by Williamson Murray, Macgregor Knox, and Alvin Bernstein, Cambridge UP, 1994, pp. 115–50.
- Peele, George. *The Troublesome Reign of John, King of England*. Edited by Charles R. Forker, Manchester UP, 2016.
- "Possession." *Oxford English Dictionary*, Oxford University Press, www.oed.com. Accessed 22 September 2023.
- Quiring, Björn. "King John and the Ordeal of the Bastard *Commodity*." *Shakespeare's Curse: The Aporias of Ritual Exclusion in Early Modern Royal Drama*. Routledge, 2014, pp. 142–66.
- Raleigh, Walter. *The Discovery of the Large, Rich, and Beautiful Empire of Guiana*. Edited by Sir Robert H. Schomburgk, B. Franklin, 1970.
- Shakespeare, William. *King John*. Edited by L. A. Beaurline, the New Cambridge Shakespeare, Cambridge UP, 1990.
- . *King John*. Edited by A. R. Braunmuller, The Oxford Shakespeare, Oxford UP, 1994.
- . *King John*. Edited by E. A. J. Honigmann, 1954.
- . *King John*. Edited by Jesse M. Lander and J. J. M. Tobin, the Arden Shakespeare, Third Series, Bloomsbury, 2018.
- . *King John*. Edited by Robert Smallwood, Penguin, 2015.
- . *King John*. Edited by John Dover Wilson, Cambridge UP, 1936.
- Smith, Christian A. "That smooth-faced gentleman … *Commodity*": Shakespeare's Critique of Exchange-value in *King John*." *Shakespeare*, Volume 13, 2017, pp. 1–14.
- Tawney, R. H. and Eileen Power, editors. *Tudor Economic Documents*. Vol. 2, Longmans, 1953.
- Watkins, John. "Losing France and Becoming England: Shakespeare's *King John* and the Emergence of State-based Diplomacy." *Shakespeare and Middle Ages*, edited by Perry Curtis and John Watkins, Oxford UP, 2009, pp. 78–9.
- Yamamoto, Koji. *Taming Capitalism before Its Triumph: Public Service, Distrust, and 'Projecting' in Early Modern England*. Oxford University Press, 2018.

日本語文献

- シェイクスピア, ウィリアム. 『ジョン王』. 松岡和子訳. 筑摩書房, 2020年.
シェイクスピア, ウィリアム. 『ジョン王』. 小田島雄志訳. 白水社, 1983年.